

停滞状態を続け、その上を多湿となった揚子江気団（低気圧）が走るために、多量の降水の日が続くこととなる。最近ではこの梅雨現象はジェット気流と非常に関連が深いといわれるようになっていた。

「夏」は、暖かい湿った小笠原気団におわれ、それに強烈な日射を充分に受け、局地的に空気が熱せられ、対流が生じ、盛んな上昇気流によって強大な積乱雲を作り夕立現象となる。子どもたちのよく

唄う「母さんお迎えうれいな」の雨の唄も、その意味からすればこの夕立ちを指すのではないだろうか。

「台風期」夏の終局から秋にかけて襲来する台風は、赤道方面に発生する熱帯低気圧で、高温多湿な大きな空気のウズ巻きで、海の上を走りながら充分に水分を補充し、ウズの中心から一五〇キロメートルでは自身の渦動性によるものが多く、幾分勢力が弱まった折に生ずる前線による降水が見ら

れる。また台風によって、山岳地方では南東側に地形性の大雨をみることもある。

「秋」は、日本附近が南北二つの高気圧の間にあって低圧部となり、前に述べたように低気圧性の降雨が弱く長続きする。

甚だ簡略ではあるが、日本の四季をおりなす雨についての概念を述べてみた。

（東京天文台）

雨



及川 栄子

雨というと、うっとりしいイメージ……。それをいっぺんに晴らしてくれるように、色とりどりの傘をゆり動かし、色とりどりの長靴をはき、色とりどりのレインコートを着て、水たまりをパシャパシャしながら

登園して来る子どもたち。この子たちは、雨が降っても、活発にいろいろな遊びを見せてくれる。

雨降りが数日続いた日のことであった。数人の子どもたちは、洋服がぬれるのもか

まわず、ペランダに出て遊んでいた。それはペランダの屋根から落ちる雨だれが、手すりにピシャンとぶつかって水しぶきが跳上がる。その中に、子どもたちはすばやくはいりこむ。身体ごと水しぶきがかかる。

「噴水だ！」と、彼らはうれしそうに叫んだ。水しぶきが四方に散ることと、つかの間のスリルを味わっている。何度も何度も。

また別の子どもたちが、雨水がベランダの手すりをつたわって、水滴が一つ、二つ、三つと、次々にできる。そのできたところを指でさわると、水滴が消えて落ちる。ゆっくり指を動かすと、水滴がポタリと静かに落ちる。早く動かすと、ポタポタと落ちる。そのうちに水滴の水が、腕をつたわって、洋服の中にはいりこみ、洋服がぬれる。それでも、子どもたちは、水滴とりをやめる様子はない。おもわず、一人が大声で、「ワー！、ピアノを弾いているみたい」。他の子どもは、同時に振り向き、また雨水のピアノを弾きはじめる。なるほど、私も実際にやってみるとおもしろい。

今度は、ベランダの屋根がたるまないように、ロープでピンと張らせている。そこを雨水がつつたわって落ちる。そのロープの

下に、あきカン、あきビン、チューブの入れ物などを置いて雨水を受ける。はじめは雨水がゆっくり落ちてくるのを待っているが、待ちきれずロープをしごくようにして、手をにぎり、雨水をしぼる。雨水がたぐさん出てくる。出なくなると他のロープへと移る。「牛のお乳しぼり見たい」と言う。その子は田舎に行つて、牛のお乳をしぼるところを見たと言いながら、一生懸命しぼる。たくさんの雨水がたまる。あきビンに入れ変える。「牛乳ができた」と走りまわり喜ぶ。大きいビン、小さいビン、チューブに入れ変えて、牛乳作りがはじまつた。

このようにして雨水が子どもたちに、喜びと、発見をあたえてくれた。「先生、頭と洋服がぬれてしまったの」と、子どもが言いに来るわけがわかった。

この遊びから、私もあらためて、七色に光る水しぶき、水滴がだんだん大きくでき

ていく様子を見ることができ、見ずじつていた点、気がついても気にとめなかった雨水に、しみじみ見つけさせられた。また、子どもと雨水のかかりあいに、思わず引き付けられて、教日間過ごしてしまった。

雨の日はつまらないと思つたのは、私の先入観であつた。子どもは、雨の日でも楽しく遊びを見つけて過ごしている。自然は、第一の遊び相手で、子どもたちの生活は、それを中心に発展し、また、自分自身への発見にもつながっていく。私も、よく子ども頃は、てるてるぼうずを窓にぶらさげて、雨がシトシト降っている様子を、なにげなくガラス越しに見ていた記憶がある。

雨とは、子どもの心の何かをゆさぶり、ひきつけるものだと思う。

この雨降りの時にこそ、心静かに、子どもたちといっしょに、じっくりと眺めていたいものである。

(追浜幼稚園)